



日本語教師におくる

# 多読授業 実践のススメ

吉川 達



国書刊行会



## はじめに

---

多読を知る前、予備教育機関で働いていた私は、毎日追われるように精読やテスト対策の読解授業を行っていました。「読解教育＝精読」と思っており、学習者が試験で高得点を取るにはテストスキルを磨く対策授業もやむなしと考えていました。しかし、読解能力は一朝一夕で向上するわけではないので、学習者の能力が伸びているのかよくわからず、手応えもあまりありませんでした。このような状況に、学習者が力がついていることを実感できたり、何かを積み上げているという感覚が持てたりするような読解教育の方法はないだろうかと漠然と考えていました。また、「読解」ということばを聞くたびに暗い顔をする学習者を見て、自分は「読書嫌い製造マシン」になっていないだろうかと自問することもありました。

そんなことを考えているときに会ったのが、多読です。多読のことを調べていくうちに、自分の知っている読解教育とはまったく異なる発想に、目から鱗が落ちるようでした。

自分で多読を実践してみようと思い、まず参考にしたのが『日本語教師のための多読授業入門』（栗野他, 2012）です。この本は、当時日本語教育における多読の唯一の専門書で、多読のルールや方法、指導のコツなど実践に役立つ情報が具体的に書かれていました。この本を監修したNPO法人日本語多読研究会（現・NPO多言語多読）は日本語教育における多読の先駆者で、多読のための読み物を作成し、日本語多読の環境を整えてくれました。私が多読を始められたのも、NPO多言語多読が日本語多読の基盤を作ったおかげです。

『日本語教師のための多読入門』の出版から10年以上が経ちます。その間、私のような多読を日本語教育に取り入れる教師や多読を研究対象とする研究者は増え、多読の読み物も紙媒体だけでなくウェブサイトで公開されている電子媒体のものが充実するなど、日本語多読をとりまく環境は以前より進みました。しかし、多読が日本語教育で十分に理解され、読解教育の一つの選択肢として普及しているかと言えば、まだ道半ばです。多読を少し聞きかじった人からは「そんな方法で読解能力が伸びるわけがない」「ただ本を読ませるだけなら、授業でやる必要はない」というような意見が

---

聞かれます。否定的な意見の中には多読の限界を的確に指摘したものもありますが、多読への理解が不十分なことから来ているものも多くあります。

多読は万能薬ではありませんが、精読やテスト対策の読解と異なる発想で、読む力をはじめとする日本語能力の向上を期待できる教育方法です。また、学習者を自律した読み手に育てたり、大人数のクラスで日本語レベルを問わず実践できたりするなど、これまでの日本語教育の枠組みにとられない大きな可能性を持ったものでもあります。

本書は、多読の理念、効果、理論的な背景、実践方法などをできる限り具体的に記述しました。「導入・説明編」には、多読の背景にある理念や考え方、精読との違い、学習者が感じる多読の効果といった、多読を特徴づける点が書かれています。続く「理論編」では、インプット仮説や認知処理の自動化など、多読の理念や実践を支える理論的な背景を説明しています。「実践編」では、教育現場で多読を行う際の枠組み、方法、留意点などを細かく紹介し、最後の「Q&A・学習者の声編」では、多読においてよく出る疑問や質問を取り上げ、それについて回答し、さらに多読を実践した学習者の声を紹介しています。これらを通して、多読がどのようなものか具体的にイメージし、その特性を理解してもらえれば本書の役割は達成です。さらに効果と限界が理解されたうえでカリキュラムへの導入が検討されれば、筆者としては望外の喜びです。

本書を執筆するにあたり、企画をご提案くださり貴重な機会を与えてくださった国書刊行会の佐藤純子さん、専門的な知見から数々の有益なご指摘をくださった横浜国立大学名誉教授の門倉正美先生にこの場を借りて心よりお礼申し上げます。

本書によって、多読が日本語教育における読みの教育の一手段として広く理解され、一人でも多くの教師の実践に結びつくことを願っています。

2024年9月  
吉川 達

はじめに

<b>第1章 導入・説明編</b> .....	7
1. 多読とは何か .....	8
1-1 やさしい読み物を読む 9 / 1-2 内容を楽しむために読む 10	
2. 自律的な読み手を育てるために .....	11
2-1 読みが苦手な学習者 12	
2-2 読みが苦手な人のサイクルからの脱却 14	
3. 読むことで読む能力を養う .....	15
4. 多読の捉え方 .....	17
5. 多読と精読の対照 .....	21
6. 教室で多読を行うことの意味 .....	25
6-1 読む時間の確保 25 / 6-2 クラスのダイナミズム 27	
6-3 多読の枠組みの提供 28	
7. 多読の効果 .....	29
7-1 読みの流暢さ 30 / 7-2 内容理解力 30	
7-3 語彙力・文字認識 31 / 7-4 読書習慣や姿勢 32	
<b>第2章 理論編</b> .....	35
1. インプット仮説 .....	36
2. 認知処理の自動化 .....	40
3. 語彙習得 .....	44
4. 内発的動機づけ .....	47
<b>第3章 実践編</b> .....	51
1. 日本語学習者のための段階別読み物 .....	52
1-1 段階別読み物とは 53 / 1-2 段階別読み物のレベル分け 54	
1-3 読み物の種類 57	

2. 学習者に人気の読み物	58
2-1 おもしろさの評価 60 / 2-2 オススメ度の評価 61	
3. 段階別読み物と母語話者向けの読み物の橋渡し	63
4. 絵本について	65
5. 小・中・高校生向けの読み物	68
6. 文学作品	70
7. ウェブサイトと無料の読み物	72
8. 多読の読み物を作る	76
9. 自分でやってみる	78
10. 仲間を集める	79
11. 読み物を揃える	80
12. 本を備える、運ぶ	84
13. 本の並べ方	88
14. 実践の方法	89
14-1 正課の授業で行う場合（全員参加型） 90	
14-1-1 がっつり多読授業 90	
14-1-2 10分間読書のように毎日少しずつ多読活動 95	
14-1-3 たまに空いたスキマ時間に行うお試し多読 96	
14-1-4 テスト対策としての短期集中型多読 97	
14-2 課外で行う場合 98	
14-2-1 希望者や読解が苦手な学習者を募って補講として行う 98	
14-2-2 家庭学習や宿題として多読を実践する 99	
14-2-3 自習として行う 100	
14-3 本の提供だけをする場合 101	
14-4 教師の関与と自律的な読み手への成長 102	
15. 読書記録	104
16. 多読用書籍のリスト	111
17. 教師の役割	112

---

18. 評価	115
18-1 読んだことに対する評価	116
18-2 日本語能力向上に関する評価	118
18-2-1 内容理解力	119
18-2-2 読みの流暢さ	120
18-2-3 語彙力	120
18-3 その他	122
18-3-1 能力記述文による自己評価	122
18-3-2 ポートフォリオ評価	126
19. 実践紹介	130
19-1 実践例1：レベルごとにノルマを課した多読	130
19-2 実践例2：レベル縦断型大規模多読	134
<b>第4章 Q&amp;A・学習者の声</b> 編	139
1. Q&A	140
2. 学習者の声	147
参考文献一覧	156

## 第1章

# 導入・説明編

多読の実践を目指すために、多読とはどのようなものか、その理念や方法、期待される効果を説明します。多読をよく知らない人、理解に不安がある人は、まずこの導入・説明編から読み始めてください。多読を十分理解していて、どのように実践するかを知りたい人は、実践編に進んでください。

日本語教育に先行して英語教育では多読の実践や研究が進んでいます。英語多読の知見は日本語教育にも応用できるものなので、その知見を本書でも十分に利用していきます。

## 1. 多読とは何か

多読とは、読んで字のごとく「たくさん読むこと」です。日本語教育の文脈で言うと、たくさん日本語の読み物\*1を読んで、読解能力を養いましょうということになります。考え方としては単純なのですが、簡単にはいきません。

世界一高い山はエベレストで、8,848mあります。テレビで見ていたらその美しさに魅了されて、「自分も登ってみたい!」と思ったとします。しかし、登山経験がない人がいきなりエベレストに行っても、麓に降り立つだけで、何もできずに帰ってくることになるでしょう。エベレストは極端だとしても、登山の経験がない人が高い山に登ってみたいと思ったら、どのような行動を起こすのでしょうか。それまであまり運動をしていなかったら、まずは近所を散歩することから始めるでしょうし、ある程度長時間歩けるようになったら次は登りやすそうな低い山に登ってみようと思うはずです。小さなステップから始めて少しずつ登る山の高さを上げていき、山登りの経験を積んだうえで、高い山に挑戦するのではないのでしょうか。

日本語学習者の読解も同じです。村上春樹の小説を原書で読みたいという目標があっても、学習者がいきなり日本語の小説を手取るのは、無謀です。本を買って「よしっ、読むぞ!」と気持ちが昂ぶっても、実際に読み始めると1行目から辞書を使うことになり、3ページもすればそっと本を閉じることになります。

高い目標があっても、段階を踏まなければその目標に到達できません。それどころか、読むのが嫌になってしまうこともあります。そうならないように、無理なく読める本をたくさん読んで、少しずつ読む力を養っていきます。それが多読です。

\*1 読み物: 本書では、読む素材を「読み物」「本」「書籍」と表現しています。多読で読む材料は冊子体のものとは限らないので「読み物」と表現することが多いですが、「本」と表現した場合は冊子体を指します。「本」と「書籍」は同義で使っています。



無理なくたくさん読むためには、いろいろと工夫をしなければなりません。まず、多読の全体像がつかめるように、たくさん読むために必要な多読の特徴的な点を二つ紹介します。一つは「やさしい読み物を読む」で、もう一つは「内容を楽しむために読む」です。

## 1-1 やさしい読み物を読む

「日本語学習のために読む」と聞くと、ふつう、難しい文章を読んでわからない単語を辞書を使って調べたり、文法書を見たりして文章のすべてが理解できるように詳しく読むというイメージを持つと思います。それは、「精読」と呼ばれる読み方です。一方多読では、学習者が自分の日本語レベルよりもやさしい読み物を（基本的に）辞書を使わずに読みます。この「辞書を使わずに」というところがポイントで、辞書使用によって読みが中断させられないので、内容に集中して速く読めます。速く読めれば、同じ時間でも読める量は多くなります。

自分の知らない単語がたくさん含まれている文章を読むときには、何度も辞書を使って単語を調べなければなりません。あまりに単語を調べる回数が多いと、読むために単語を調べているのか、単語を調べるために読んでいるのか、わからなくなってきました。また、辞書を使うときには、読んでいる内容から意識が一時的に離れることになります。辞書を使うのが1ページに一度や二度くらいなら、読んでいる内容を覚えているかもしれませんが、回数が重なると、読みの中断が増えて内容に集中できなくなり、本の内容を楽しめなくなります。多読では、そうならないように辞書を使わないで読めるような、やさしい読み物を読みます。辞書を使わずに読めば、読みを中断されることなく内容に集中することができます。

「難しい文章を読まないで、勉強にならない。やさしい読み物を読んでも、意味がない」と言う学生もいます。その考えを否定するわけではありません。ただ、多読は、これとはまったく違う発想に立つ読む力の育成方法なので、多読に取り組むときには、学習者も教師も発想を転換する必要があります。

## 1-2 内容を楽しむために読む

多読では、内容に集中して読みます。日本語の授業なので、教師は新しく学習した語彙や文法がたくさん含まれている読み物を読んでほしいと思いますが、多読ではそのような観点で読み物を読みません。あくまで学習者が興味をもつものや読みたいものを読みます。ふつう私たちが余暇に読書をするときには、内容を楽しめる本を選んで読んでいると思います。それと同じように多読では、学習のために読むという意識は一時的に脇に置いて、とにかく内容を楽しむために読みます。多読は、ふだん実際に行っている読みを教育的な目的で行うこと (Day & Bamford, 1998, p.5) で、その結果として読む力をはじめとした日本語力を養うのです。

学習者が本の世界に入り込んで内容を楽しむためには、学習者の興味や関心に沿った読み物が必要です。読んでいるものがつまらなければ、学習者は読むことを苦痛に感じるかもしれないし、読むことをやめるかもしれません。反対に、おもしろい読み物であれば、どんどん先を読みたいと思うようになり、読みに集中していきます。読後の満足感も得られます。次はどんなおもしろい読み物があるのだろうと、期待もします。それが継続的な読みや読みの連鎖につながっていきます。人によっておもしろいと感じるものは違います。物語が好きな人もいれば、ノンフィクションに興味を持つ人もいます。学習者それぞれの興味に応えられるように、多読の実践では、多くの種類、ジャンルの本を揃えておきます。

多読も日本語教育の一環です。教育なので、「教師が学習者の読むべき物を決めなければならない」と考える人もいるかもしれませんが、しかし、多読においては、何を読むかの決定権は学習者にあります。教師がアドバイスをすることはあっても、読む物を強制的に決めることはありません。それは、学習者の注意を読み物の内容に向かわせ、楽しみながら読みを進めるためです。

自分の日本語レベルで読めるやさしい読み物を、辞書を使わないで読む。自分が興味を持って読みたいと思う読み物を、読む。そのような読み

物をたくさん読むことによって、結果的に日本語の能力を向上させようというのが、日本語教育での多読です。

文法を教えたり、新しい語彙を覚えたり、難しい文章を精読したりするような、日本語教師がイメージするような学習と、多読は発想が異なります。多読を理解し実践するには、このことを強く意識する必要があります。

## 2. 自律的な読み手を育てるために

授業で多読を行うときの最終的な目標は、学習者がよい読み手になること、そして読書習慣を身につけて自律的な読み手になることです。

よい読み手とは、どのような人でしょうか。定義はいろいろあります。大学のようなアカデミックな場では、読んだ内容を批判的に捉えることなどもよい読み手の条件に入ります。本を読むと、内容に触発されているいろいろなことを考えます。読んで何を考えるか、そこから肯定的にも否定的にもどのような気づきを得るかは、読むことを通して行う重要な思考活動です。自分の今までの経験や持っている知識と読んだことを結びつけ、新たな思考を展開できることもよい読み手の一要素と言えます。最終的には多読を通してそのような知的活動の能力を養ってほしいのですが、ここではそこまで応用的なことは要求せずに、まずは、内容を十分に理解しながら、長い文章でも読み通せて、少し速いスピードで（＝流暢に）読み物が読める学習者をよい読み手としておきます。

文章の内容を十分に理解する力、長い文章を読み通せる力を持つことが読みの基礎的な力であり、高度な読みの前提となります。こうした読みの基礎的な力を習得し、そのうえで、読むスピードが今より向上し、さらに読書習慣が身について自主的に本を読むようになれば、教室での多読の目標は達成したと言ってもよいでしょう。

よい読み手とは

- 書かれている内容を十分に理解しながら読める
  - ある程度長い読み物でも読み通せる
  - 流暢に読める
- +
- 読む習慣が身についている

自律的な  
読み手

2-1 読みが苦手な学習者

よい読み手ではない学習者、言い換えれば読むことが苦手な学習者は、どうして苦手意識を持つのでしょうか。Nuttall (1996) の以下の図が、それを説明しています（日本語訳は筆者が挿入）。

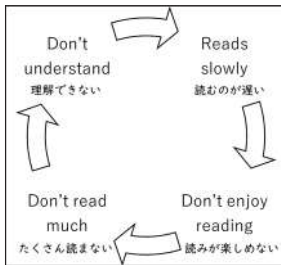


図1 読みが苦手な人のサイクル

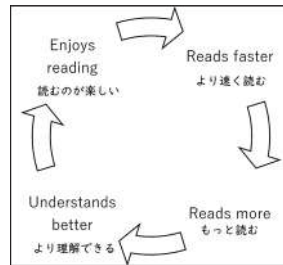


図2 よい読み手のサイクル

(Nuttall, 1996, p.127をもとに作成)

左の図1を見てください。この図は読みが苦手な人が陥っているサイクルを示したものです。四つの事象があってもどこから始めてもいいのですが、左上の「Don't understand (理解できない)」から始めて説明します。まず、読みが苦手な人は、読んだ内容をあまり理解できません。読んでいる内容が難しすぎて理解できていないかもしれないし、自分には読めないと最初から諦めているかもしれません。文章が理解できなければ、何度も読み直したり辞書でことばを調べたりします。その結果、読むスピードが遅くなります (Reads slowly (読むのが遅い))。もともと文字を追うのが苦

手な人もいます。読むスピードが遅くなると、読みを楽しめなくなります (Don't enjoy reading (読みが楽しめない))。何度も辞書を使いながら読むのがどれほど苦痛かは、外国語を学習したことがある人の多くが経験しているでしょう。読書を楽しむにはある程度テンポよく読んでいくことも必要です。読むのが楽しくないと、自主的に読まなくなります (Don't read much (たくさん読まない))。また、読むスピードが遅いので、結果的に読める本の量が少なくなることも考えられます。そして、ほとんど本を読まなくなると、読む力も向上しないので、次に本を読んでもあまり理解できない (Don't understand (理解できない)) という悪いサイクルに陥ってしまいます。

一方、よい読み手はどうでしょうか。図2を見てください。これも同じように左上の「Enjoys reading (読むのが楽しい)」から説明します。よい読み手は、本を読むことを楽しみます。読む習慣が身につけたり、過去に読んだ本が楽しかったりして、読書に対して肯定的に取り組むことができます。内容に集中して、どんどん読み進めていくので、読むスピードが速くなります (Reads faster (より速く読む))。読むことに慣れているということもあるし、わからないことばがあっても文脈から推測したり、わからない部分は読み飛ばしたりするなど読むストラテジー\*2も身につけているので、テンポよく読めます。読むスピードが速いと、1冊の本を読み終える時間も短く次の本に移れるので、たくさん読むことになります (Reads more (もっと読む))。読むことに対する動機づけも高く、1冊の本を読み終わってもそれで満足するわけではなく、また次の本を読み始めます。たくさん読むと、読むスキルが上がって、本の内容がよりよく理解できます (Understands better (より理解できる))。いろいろな本をたくさん読むことによって教養的知識が蓄えられ、その結果、次の本を読んだときに内容への理解が深まり、よりよく理解できるということも考えられます。そして、理解が深まれば、読むことがさらに楽しくなるのです (Enjoys reading (読むのが楽しい))。こうしたよい読み手のサイクルに入る

---

\*2 ストラテジー：ある目的を達成するために行う戦略のこと。

ことができれば、学習者は自律的な読み手へと成長していきます。

## 2-2 読みが苦手な人のサイクルからの脱却

では、どうすれば読みが苦手な人の悪いサイクルをよい読み手のサイクルに変えることができるのでしょうか。その一つの方法が、多読です。多読を行うことで、このサイクルがどのように変わるか説明します。

学習者は、多読で自分の日本語レベルよりやさしい読み物を読みます。つまり「読みが苦手な人のサイクル」の「Don't understand (理解できない)」が解消されます。やさしい読み物を、辞書を使わずに読めば、読むスピードも自然と上がります (Reads faster (より速く読む))。ことばの問題にわずらわされることなくどんどん読み進められるので、本の内容に集中することができます。そうすると、内容を楽しむことができるようになって読むことが楽しくなり (Enjoys reading (読むのが楽しい))、読み終わった後も、また次の本を読もうと動機づけが高まります (Reads more (もっと読む))。そうしてたくさん読むことによって、内容の理解力が高まって読む力が向上し、次に読む本の理解力が高まることになります (Understands better (より理解できる))。

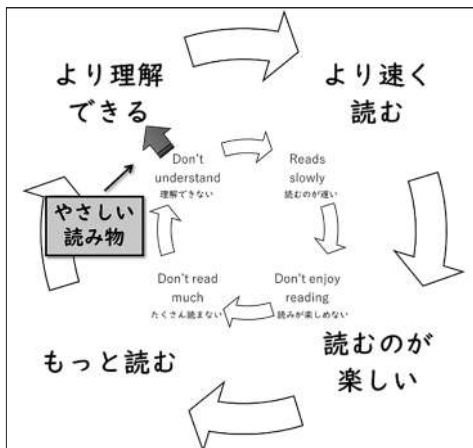


図3 よい読み手への転換

このように、多読でやさしい読み物をたくさん読めば、読むことが苦手な学習者とそのサイクルを脱して、よい読み手に変わっていく可能性が生まれます。

### 3. 読むことで読む能力を養う

学習者には、もともと読書が好きな人もいれば、嫌いな人もいます。また、日本語能力試験のN1に合格しているような、すでに日本語能力が高くテストの読解では高得点が取れるような人もいます。そのような学習者に対して多読はどのような意味を持つでしょうか。

母語で読書習慣が身につけている学習者は、もともとよい読み手である可能性が高いです。その素地を活かして、日本語でもどんどん読んでいければよいでしょう。ただし、読書好きとは言っても外国語での読書に慣れているわけではないので、最初から母語話者向けの読み物を読むことはできません。学習者向けに書かれた、自分の日本語レベルよりやさしい読み物を読むことから始めます。自分の日本語レベルで読める読み物があれば多読はどんどん進むし、読書好きの学習者にとって多読の授業は天国のような時間になります。

日本語能力が高い学習者であっても、読解が得意とは限りません。母語でもほとんど本を読む習慣がなく、授業やテストのためだけに文章を読むという学習者も多くいます。そのような学習者は、まず本を1冊読み切る経験をして自信をつけ、本を読む楽しさを知ることが大切です。

本を読むことに興味があって、過去に日本語の本を読もうとしたけれど挫折したという学習者もたくさんいるはずです。それは、読む本の日本語が難しすぎたのです。せっかくのやる気が失われてはもったいないので、自分の日本語レベルで読めるやさしい本を読んで、そのやる気を活かすべきです。

それ以外の、本を読むことが好きでも嫌いでもない人たちには、日本語